

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0728
施設名	七海保育園
施設所在地	東京都中野区大和町4-12-10
法人名	社会福祉法人青柳保育会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然

<テーマの設定理由>

子どもたちの「なんで?」という探求心を育むことが目的。幼児期は五感を用いて自然環境や自然物へと興味を持ち始める時期であり、自ら調べ、学ぼうとする姿勢を引き出したい。

2. 活動スケジュール

1月：雪の結晶（溶ける前の結晶を拡大投影し、全員で微細構造を観察）
2月：食育活動（野菜や果物の断面・種、職員による調理の様子を投影）
3月：季節の花（摘んできた花のおしべや花びらをズームして仕組みを発見）

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

季節の花や雪の結晶、食育用の食材などの自然物と、拡大投影用の端末を用意した。室内には電子黒板を設置し、全員で画面を囲める動線を確保した。端末と電子黒板をミラーリングで接続し、結晶の溶ける変化や花の細部を即座に大画面へ映せる環境を設定。さらにデジタル図鑑や関連画像を事前準備し、実物と映像をシームレスに行き来しながら、子どもが五感と視覚を連動させて主体的に探究できる環境を整えた。

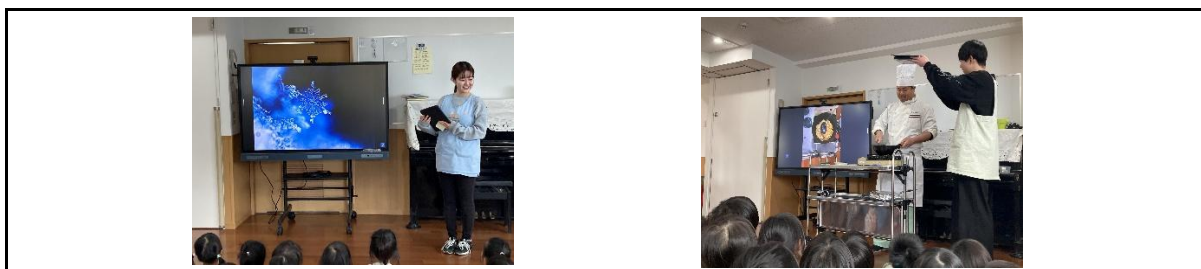
4. 探究活動の実践

<活動の内容>

電子黒板を活用し、自然環境への探究活動を実施した。屋外で摘んできた花をミラーリングで大画面に拡大投影し、全員で微細な構造を観察。さらに、子どもの興味に合わせて電子黒板にデジタル図鑑や関連画像、食育活動の様子を投影し、視覚的なアプローチで理解を深めた。ICT機器を効果的に用いることで、乳幼児の自然物に対する好奇心や、子ども同士の気づきの共有、対話を促す環境を構成しました。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

電子黒板に映る季節の花や雪の結晶の大画面に、子どもたちは「大きい!」「これ何?」と目を輝かせた。食育活動では食材の断面に驚き、画面を指差しながら発見を競うように教え合う姿が見られた。保育者が「ここはどうなっているかな?」と問いかけると、子ども同士で「ここがザラザラしてる」と言葉を交わし、気づきを共有。ICTを通した視覚的な驚きが、対話やさらなる探究心を引き出すきっかけとなった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

大画面での振り返りを通じ、幼児期におけるICT活用が自然への探究心を劇的に高めることに気づいた。雪の結晶の儚い変化や食材の微細な構造を全員で同時に見つめることで、一人では見落とす気づきがクラス全体へ伝播する良さがある。また、画像を見ながら自分の言葉で発見を再言語化する姿から、電子黒板は単なる視聴覚教材ではなく、子ども同士の対話や思考の深まりを可視化する有効なツールだと実感した。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0728
施設名	七海保育園
施設所在地	東京都中野区大和町4-12-10
法人名	社会福祉法人青柳保育会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

体幹

<テーマの設定理由>

幼児期に身につけたい36の基本的な動きを育むことが目的。子どもの運動能力低下が注目されている中で、子どもが好奇心や探求心をもって自発的に体を動かせるよう、興味を惹きつける運動環境を設定した。

2. 活動スケジュール

第1期（4月～6月）：体のバランスをとる動き（巧技台や平均台を用い、「登る」「降りる」「渡る」で体幹と足裏感覚を養う）
第2期（7月～9月）：体を移動する動き（フープやトンネルを用い、「跳ぶ」「這う」「くぐる」で自発的な全身連動を高める）
第3期（10月～12月）：用具を操作する・力加減を学ぶ動き（「またぐ」「超える」「転がる」で敏捷性を育む）
第4期（1月～3月）：多様な動きの組み合わせ・挑戦（複合サーキットを用い、高低差や傾斜に自ら挑む「挑戦心」と「達成感」を味わう）

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

巧技台の高さに変化をつけ、平均台（ビーム）を連結させて、高低差のあるサーキットを構成した。あえて不安定な足場や傾斜をすることで、幼児が自然にバランスを取ろうと腹筋や背筋を意識できる環境を整えた。足裏の感覚を研ぎ澄ませるため裸足で実施し、安全面に配慮して着地地点には厚手のマットを配置した。

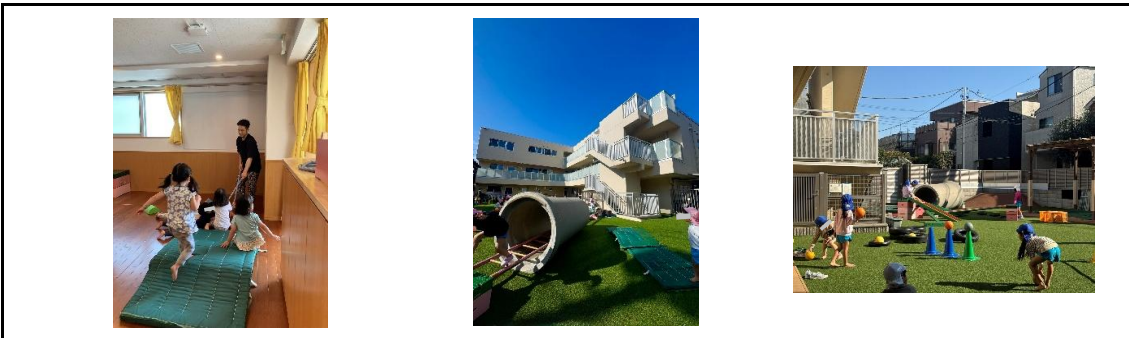
4. 探究活動の実践

<活動の内容>

講師の指導のもと、巧技台や平均台を組み合わせたサーキット形式で実施した。子どもたちが自分の力に合わせてコースを選び、バランスを取りながら「カニ歩き」や「ハイハイ」など思い思いのスタイルで挑戦する姿を見守った。保育者は安全面に配慮しつつ、子どもが自ら体幹を意識して一歩ずつ踏みしめる過程を大切に、達成感を味わえるよう適切な距離感で関わった。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

「おっとっと！」と笑いながら平均台でバランスを取る子や、講師のアドバイスを聞き「お腹に力を入れるんだよね」と真剣な表情で一歩ずつ踏みしめる姿が見られた。難しいコースに挑む友達を「がんばれ！」と応援し、渡り切ると一緒に喜ぶなど、互いの挑戦を認め合う温かい関わりが生まれていた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

講師の専門的な視点と安全な環境設定により、子どもたちが自ら難易度を選び、集中して身体を動かす姿が印象的であった。特に平均台でふらついた際、自ら腹筋に力を入れバランスを立て直そうとする姿に、内面的な「体幹」への意識の高まりを感じた。主体的な挑戦を促す見守りの大切さを再認識した活動となった。